

## 大学を拠点に保育者志望学生と多世代が交流する新しい子育て支援の実践 —「そうじゃ子ども大学」の事例から—

新山順子（岡山県立大学保健福祉学部） 京林由季子（岡山県立大学保健福祉学部）

樟本千里（岡山県立大学保健福祉学部） 高橋多美子（環太平洋大学次世代教育学部・岡山県立大学非常勤）

本論では、新しい子育て支援の実践である「そうじゃ子ども大学」について、大学と地域の連携の在り方や実施体制の整理を行い、参加した学生の学びの在り方を検討した。事後の内省の分析により、学生の学びは、子育てや家族の多様性に関する新しい気づき、援助の在り方への様々な着眼、実体験の価値、親子遊びへの意義、等に整理された。学びの様相から、学生がこのような取り組みに参加することで、子どもを中心とする家族の在り方、またその援助について実践的な学びを深められる可能性が示唆された。

キーワード 子育て支援, 実践, 大学, 地域, 保育者養成

### はじめに

近年、我が国では、家庭での子育てが孤立化し、母親の子育ての不安感・負担感の増加が課題となっている。岡山県では、子育てを取り巻く課題解決の手立ての一つとして、大学内子育て支援拠点「おかやま子育てカレッジ」事業を推進している<sup>1)</sup>。岡山県内では、2008年に初の取り組みとして実現<sup>2)</sup>し、岡山県立大学では、2010年より大学が立地する地域（総社市）と共に、子育て支援の取り組みを具体的に開始した。現在、大学内子育て広場の開設や広場に集う親子と交流する協働授業等、大学の資源を活用した子育て支援を積極的に行っているところである。しかし、これらは主として、乳幼児と母親を対象としており、保育士・幼稚園教諭養成課程を有する大学としては、さらに幅広い世代を対象とする子ども・子育て支援や交流事業を地域から期待されている。以上のような背景から、

岡山県立大学では、大学・地域の子育て支援を専門とするNPO・行政が連携して、新しい多世代交流の子育て支援事業「そうじゃ子ども大学」に取り組んだ。本論では、その実践事例について報告を行い、特に、新しい取り組みを行う際の大学と地域の連携の在り方や実施内容の整理、及び保育者養成教育との関連や可能性について論じる。

### 1. 保育者養成大学と子育て支援の 取り組み

既述の「おかやま子育てカレッジ」を基盤とする子育て支援事業では、授業の一部を子育て広場と協働で行うことにより、学生は子育て支援の現場を身近に体験することができ、大学附属幼稚園や保育所のない本学においては貴重な機会となっている。以上については、一定の実績を積み重ねることができ、事業が3年目を迎えた年

度に活動報告書をまとめた<sup>3)</sup>。しかし、以上の交流事業は、何れも3歳未満の乳幼児と母親を対象とするものが中心で、保育者養成を担う大学としては、さらに幅広い世代を対象とする子ども・子育て支援や交流事業を地域から強く求められている。また、保育者を目指す学生の学びの側面においても、『保育所保育指針』に「地域における子育て支援」の推進等が<sup>4)</sup>明確に示されているにもかかわらず、これまでは地域の様々な人々との交流や連携等によって学びを深めることに、あまり着目できていなかった。乳幼児や母親と触れ合うことは最重要であるが、それ以外の父親や祖父母、子どもを取り巻く地域の多世代の人々と幅広く関わる視点も、これからの保育者養成教育には必要であろう。

全国でも多くの保育者養成大学が、子育て支援の重要性を認識して、教育や地域貢献として精力的に取り組み始めており、研究報告等も次第に増えている。金田・山路・滝口（2005）は、東京都小平市にある大学の構内に世代間交流の広場を設けて、その実践の成果と課題について報告を行っている<sup>5)</sup>。また、須永（2014）は、子育て支援活動を保育者養成の教育課程に「子育て支援」という科目として位置付けた北海道石狩市の大学の事例を取り上げ、検討している<sup>6)</sup>。このような先駆的な報告では、実践の新しい価値を示唆しており、非常に興味深い。しかし、各大学とも保育者養成大学として地域の要望に応えることと、養成教育との意味のある接点を見出すために、未だ内容や方法を模索している状況であることが窺える。

## II. 多世代が交流する新しい子育て支援の実践 —官・民・学の連携と実践の構想

本実践の取り組みは、2014年8月に、子育て支援を専門とするNPO保育サポート「あい・あい」<sup>註1)</sup>による、大学の人的・物的資源を活用した新しい子育て支援の要望・発案に始まった。大学としては、既に、乳幼児の子育て支援の実績があり、子育て広場等の環境整備がなされていたが、新規取り組みでは、小学生以下の子どもと家族（父母・祖父母）が遊びを通して学ぶ場を構築することを提案された。その後、討議が進められ、岡山県立大学を会場に、保育者養成に関わる教員と学生が、企画・実践の中核を担うことになった。さらに、岡山県備中県民局が加わることになり、官・民・学が連携して取り組むこととなった。図1にそれぞれの役割を整理して示した。主催は、NPO保育サポート「あい・あい」で、事務局として事業を総括した。岡山県立大学の教員と学生は、会場提供、遊びの計画と実施を担当し、岡山県備中県民局は企画の推進と助成を行った。

事業の名称を大学が立地している市の名前を冠して「そうじゃ子ども大学」とし、

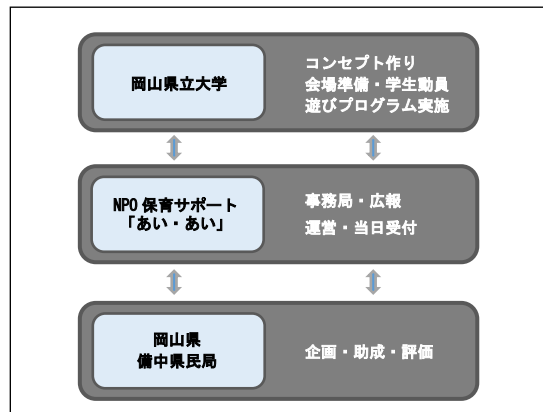


図1. 官・民・学の連携と役割

その目的は、小学生以下の子どもとその家族が、大学の資源を活用した様々な遊びのプログラムを体験することで、親子間や参加した家族同士、あるいは地域の人（地域の子育て支援者も遊びの研修として見学・参加してもよいとした）と交流を深めることとした。子どもを中心に、多世代による多様な関係性が構築されることを意図した。

### III. 「そうじゃ子ども大学」の遊びプログラムの方向性と内容

「そうじゃ子ども大学」の遊びプログラムとしては、現代の子どもや親子間に不足している他者との有機的な交流や、創造性や想像性を大切にしたい遊びを提供したいと考えた。具体的には、大学の人的・物的環境を利用して「人とかかわる」「手や体を動かす」「作り出す」「感じる」等の行為が創出される遊びを検討した。その結果、プログラムに位置付けた遊びは、会場である大学の自然環境を活かした「県大ウォークラリー」、保育専門科目の教材を活用した「ことば遊び（ことばを作ろう）」「科学遊び（尿素でクリスマスツリーを作ろう）」「ダンスワーク」、以上の4つである。詳細は、資料1の通りである。大学で開催する事業では、大学の特性を活かした活動が求められる。教員は、保育専門科目の授業で実際に利用している教材を、親子向きに再考して体験してもらう等の工夫をした。授業で経験していることもあり、学生も遊びの援助に積極的に関わることができる考えた。

会場は、資料2に示したように、参加者

が行き来しやすいよう1つの棟を中心に各教室を配置した。「県大ウォークラリー」は、大学構内全域を活用した。

資料1. 「そうじゃ子ども大学」の遊びプログラム（「そうじゃ子ども大学」広報リーフレットより抜粋）

活動名	活動内容
県大ウォークラリー	大学構内に設置された3か所のポイントを探して廻りましょう。但し、各ポイントには、ミッションが用意されています。すべてのミッションを達成すると・・・（それは参加してのお楽しみ!?)
科学遊び 「尿素でクリスマスツリーを作ろう」	尿素の結晶でクリスマスツリーを作ります。結晶が徐々に成長して、クリスマスツリーになる過程が観察できます。その不思議さに感動します。
ことば遊び 「カードでことばを作ろう」	日本語は上から下へ、もしくは右から左へと読みます。読みのルールにしたがって、カードをつなげ2文字のことばを作りましょう。いくつのことばを作ることができるでしょうか。
ダンスワーク①・②	人とかかわりながら、自分なりの動きを見つけていく表現的な活動です。思うままに動くことを楽しみましょう。体をほぐしてから、いろいろな動きに挑戦したり、変身してなりきって動いたりすることを楽しみます。

資料2. 会場案内図（「そうじゃ子ども大学」当日配布資料より抜粋）



#### IV. 「そうじゃ子ども大学」の実践概要

「そうじゃ子ども大学」は、2014年10月26日に、岡山県立大学を会場として、開催された。企画・実践に携わった教員は、筆者ら4名である。参加学生は、33名（2年生21名、3年生7名、4年生5名）である。教員は、当日は遊びの説明・進行・学生の配置や指導を行った。学生は、事前の打ち合わせにより各自役割を持ち、遊びの援助を行った。2年生は学年全員で保育内容の授業の一部として参加し、3年生以上は、ゼミ活動の一部として参加し、自発的に参加した者も数名いた。地域からの参加者は、25家族82名であった。以下、活動別に概要（内容・参加者の様子・学生の関わり方と当日の様子・実践者の課題や反省）を整理する。参加者及び学生には、実践の趣旨を説明して、写真撮影・調査資料収集・成果報告作成の許可を得た。

##### 1. 県大ウォークラリー

「県大ウォークラリー」では、「歩いて、歌って、考えて、県大の収穫祭を楽しもう！」をテーマに、参加者と学生の交流が深められるように、3箇所のポイントで学生と関わる「ミッション」（遊び）を用意した。開催時期がちょうどハロウィン間近であったため、学生は写真1のように魔女

やお化けの扮装をして、受付と3箇所のポイントを2名ずつ担当した。各ポイントの場所、「ミッション」、扮装、教材は教員（京林）の助言を受けて学生が計画し準備した。第1のポイントは「風船運び」で、学内の石碑「吉備の鉄人」を探し風船運びを行うもの、第2のポイントは「秋の歌を歌おう」で、国際交流センター前の芝生広場で、写真2のように歌詞カードを選択し学生と秋の歌を歌うもの、第3のポイントは「小さな紙をくぐれるかな」で、写真3のように葉書大の小さな紙を鋏で工夫して切ってくぐるものである。参加した親子・家族は受付順に順次出発し、地図を頼りに構内の3箇所のポイントを廻り、各ポイントの遊びを学生と共にを行った。

約30分～40分程度で回れるコースであるが、時間を競って走って回る者、学内の散策を楽しむ者など、様々な親子・家族の姿が見られた。事後の反省点としては、内容により、小学校高学年の子どもになると恥ずかしがる子が出てしまったり、場所が不足して待ち時間が長くなってしまったりしたことである。しかしながら、学生にとっては、同じ「ミッション」の内容でも年齢による参加者の反応の違い、幅広い年齢の参加者に対応出来る多様な内容の準備の必要性、適切な人員配置等に気付く機会とすることができたと考える。



写真1. 魔女に扮した学生がお出迎え



写真2. 芝生広場で秋の歌を歌う



写真3. 子どもの作業を見守る学生

## 2. 科学遊び

### (尿素でクリスマスツリーを作ろう)

科学遊びは、自然の不思議さや美しさを体感し、知的好奇心を育むことをねらいとして、1回30分間、10組の子ども・保護者の参加で、3回実施した。さらに、子どもだけでは難しい部分もあるため、親子で協力して製作し、親子のコミュニケーションを育むと共に、感動体験を共有することもねらいとした。尿素ツリーは、尿素の再結晶を利用した保育教材である。尿素ツリーの作り方は、まず、ツリーの土台となる濾紙を水溶性ペンで着色し、ツリーの形を作る。この着色によって結晶も着色される。次に、尿素の飽和水溶液を作る。この際、繊維状のきれいな結晶ができるように、洗濯のりと台所洗剤を少量加える。最後に、飽和水溶液をスポイトで土台の濾紙に掛ける。時間の経過と共に、少しずつ結晶が

成長していき、半日から1日で尿素ツリーが完成する。

学生は、3日前に同様の実験を「保育内容(環境)」の授業で行い、実験手順・取り組みのねらい等を理解した上で、当日のプログラムに参加した。説明・進行は、高橋が行い、学生は、**写真4**に示すように、子ども・保護者の援助に当たった。小学校高学年の子どもは、自主的に友達と、年少児から小学校中学年の子どもは、**写真5**のように保護者と協力しながら興味を持って取り組んでいた。子どもは、**写真6**に示すような尿素の結晶を見て「きれい」「雪みたい」等の言葉を発していた。実践の反省としては、子どもへの対応に難しさを感じる学生が一部おり、援助方法について事前にもう少し時間を取るべきであったと考える。



写真4. 科学遊びを援助する学生



写真5. 親子で取り組む様子



写真6. 尿素の結晶によるツリー

## 3. ことば遊び(カードでことばを作ろう)

「ことば遊び(カードでことばを作ろう)」は、文字を作りながらカードを並べていく遊びである。カードは、参加学生が、事前に行われた樟本担当の授業「保育内容(言葉)」でことば遊びの教材として作成した。授業では、名詞及び動詞バージョンのカードを作成したが、今回使用したものは名詞バージョンである。**写真7**のように、

1枚のカードには各辺に1つの文字が書かれている。すなわち、1枚のカードにつき4文字が記されている。あるカードの辺と別のカードの辺を合わせて、2文字の「単語」を作る遊びである。教室の中に4つのテーブルを準備し、**写真8**のように学生1名が各テーブルを担当した。教室前面の黒板に**資料3**の内容を記すとともに、テーブル担当の学生が参加者へカードの使い方

を教示したり、一緒に活動に参加したりした。また、教室壁面に絵本『あいうえおのき』<sup>7)</sup>を参考に、「ことばの木」を作成して、文字作りがイメージしやすいように工夫した。

参加者は予想より少数であったが、参加した子どもは、長時間活動に集中する傾向があった。文字に興味を持ち始めた就学前の子どもにとっては、自分一人でカードを繋げていくことは難しく、**写真9**のように一緒に参加した家族の助けを借りながら単語を作っていた。小学校中学年になると、同じテーブルの同じ年齢の参加者とアドバイスをしあいながら、各々でカードを繋げることができていた。参加した学生は、手持ち無沙汰な時間もあつたが、子どもが少しでも興味を持つように、この教材のねらいが伝わるように環境を構成し、また、

活動の説明の仕方を考える貴重な機会となった。

資料3. ことば遊びの遊び方説明(当日掲示物より抜粋)

1. じゃんけんで勝った人から、時計回りでカードを引きましょう。
2. 横か縦で、ことばを作りましょう。
3. ことばをたくさん作って、カードをたくさんつなげましょう。

☆ことばをつくることができなかつたカードは、真ん中におきます。

真ん中のカードは、だれが使っても良いです

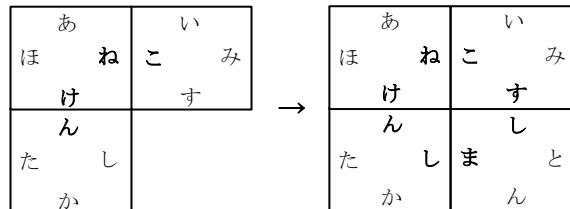
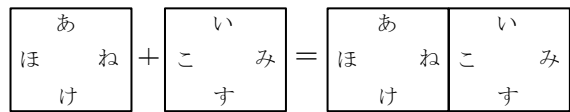


写真7. ことば遊びに活用したカード

写真8. ことば遊びを援助する学生

写真9. 家族で取り組む様子

#### 4. ダンスワーク

「ダンスワーク」は、多世代の多様な表現を認め合い交流が深まるように、自由に即興的に動く表現的な活動を中心にした。基礎的な内容で動いたり踊ったりする「ダンスワーク①」と、小学生以上の参加に限定して、何かになりきることやイメージに相応しい動きを見つける応用的な内容の「ダンスワーク②」の2つの活動を行った。「ダンスワーク①」では、**写真10**のよう

な体ほぐしをした後に、**写真11**のように2人組で様々な動き方に挑戦した。「ダンスワーク②」では、モンスターの子供が進化するジャンケン遊びをした後に、舞踊教育教材「ジャングルカルタ」<sup>8)</sup>を用いて、3~4人のグループで、ジャングルの場面を想像して、**写真12**に示すように自由に動いた。ワークの時間は、1回30~40分である。説明・進行は新山が行い、学生は教員の補助的な役割として参加した。学生とは、

事前に活動の流れと援助の方法を確認し、実際に参加者と共に動くこととした。

参加の子ども・家族は、終始笑顔で、どの活動においても積極的に動いたり、踊ったりしていた。親は見学ということも想定していたが、参加した殆どの親は率先して動いており、子どもと共に表現を楽しんでいるように捉えられた。学生は、参加者の輪に積極的に入り、コミュニケーションを

深め、場を盛り上げる役目を果たすことができた。実践の反省としては、作品創作が入れば、より参加者同士のコミュニケーションが深まったのではないかと考える。例えば、カルタの好きな場面を繋げて小作品を作る、等である。グループごとに、学生が配置されれば、創作のリーダーとして学生の実践的な力量も磨かれるであろう。



写真10. 参加者全員で体ほぐし



写真11. 親子で新しい動きに挑戦



写真12. カルタの場面を表現する

## V. 参加学生の内省から読み取れる学びの在り方

### 1. 内省の収集と分析の手続き

参加学生には、事後に「参加した感想を、参加して学んだことを中心に記述する」ことを依頼した。書き方に条件はなく、自由記述とした。記述する用紙には、罫線が4行入っており200字程度記入可能な用紙を使用した。学生には、実践の趣旨を説明し、公表する際には個人名を特定しないこと等について承諾を得た。以上の手続きにより、25名分の内省を収集することができた。収集した内省は、分析のために、内容のまとまりで文を区切った。質問の意図に合わない記述、例えば体験したことのみを書き、学んだことを書いていないものは削除して、20件に整理した。それらをKJ法<sup>9)</sup>の手法等を参考にして、筆者ら4名で似通った内容を整理して、見出しを付けカテゴリ

一に分類した。学生の関わり方は、活動により、①これまでの保育専門科目の学びを基盤に教員の進行の補助として関わる（「ダンスワーク」）、②これまでの保育専門科目の学びを基盤に教員の指導を受けながら遊びの選定や方法から関わる（「県大ウォークラリー」）、③保育専門科目の授業の一環として関わり、授業で事前指導を受けて臨む（「科学遊び」「ことば遊び」）、以上、3通りの関わり方をした。しかし、本論では、「そうじゃ子ども大学」における総括的な学びの在り方に着目するため、活動や関わり方の違いで分類・整理することはしないで、収集した内省は一括整理して、カテゴリー化した。

### 2. 参加学生の学びの様相

学生の内省から読み取れる学びは、表1のように「A：父親参画の子育て」「B：子ども理解」「C：家族の多様性」「D：活動

に相応しい援助」「E:発達をふまえた援助」「F:実体験の価値」「G:親子遊びの意義」、以上7つのカテゴリーに分類することができた。以下、カテゴリー別に確認する。表1の文中下線は、考察における重要箇所として筆者らが付した。

「A:父親参画の子育て」では、父親の参加を、あまり期待していなかった学生の率直な実感が記述されている。授業で父親参画の子育てやその必要性について学んでいても、子育ては母親が中心になって行うものという意識があり、そのような固定観念を覆される体験となったようである。

「B:子ども理解」では、遊びに向かう子どもの姿に感銘を受けている様子が読み取れる。また、遊びを行う子どもを観察して、子どもの表現能力やその広がりを実感している様子が読み取れる。このような気づきは、子どもをさらに深く理解しようとする姿勢へ繋がるであろう。

「C:家族の多様性」では、子どもを中心とした多様な家族の在り方に言及している。学生は、普段学内の子育て交流広場で母親と乳児に接する機会はあるが、見慣れている母親と子どもの関わりでも、家族により様々である。また、母親以外の大人と子ども等、多様な組み合わせの関係性にも触れており、視点の広がりが窺える。

「D:活動に相応しい援助」では、実際に活動の援助を行ったことから、援助を通して実感したことが記述されている。声かけや配慮の重要性に触れたり、科学遊びの計量などの具体的な場面に言及して、個別

の配慮と集団における配慮の問題について考えを巡らせている。体験を通して、さらに遊びが広がる展開を提案している点も学びの深化と捉えられる。

「E:発達をふまえた援助」では、特に発達的な視点で子どもを観察し援助の在り方やその難しさについて言及している。内省からは、幅広い年齢層の子どもと円滑にコミュニケーションをとるために工夫している学生の姿が浮かび上がる。子どもに理解させるための援助の困難さに触れている記述もあり、事前授業で仲間同士でリハーサルを行っているにもかかわらず、子どもの前では未熟さを実感した様子が窺える。体験から真摯に学び取ろうという姿勢も見える。

「F:実体験の価値」では、大学の講義・演習では経験できない実体験の価値について言及している。ウォークラリーのポイントの遊びを工夫したり、仮装して子どもを喜ばせたりしたことを踏まえて、とても良い経験になったと述べている。子どもに連れ添う保護者も様々であることも認識し、貴重な機会になったことが窺える。

「G:親子遊びの意義」では、親子で一緒に遊ぶことの意義に言及している。親と子どもが、親密に一体となって創造的な活動に取り組む姿は、温かく引き込まれるものがあつたと推察する。以上のような体験による認識は、親と子どもを繋ぐ役割を担う保育者として、将来確実に活かされるであろう。



表1. 「そうじゃこども大学」参加学生の事後の内省の整理

カテゴリー	学生の内省事例
A：父親参画の子育て	内省1：自分が思っていたよりもお父さんの参加がとても多く見られ、とてもあたたかな実践の様子が見られた。(2年生・学生O)
	内省2：母親と子どもだけでなく、父親と子ども、祖父母と子どもといった姿も見られ、このようなイベントに父親も来ていて、少し驚いた。(2年生・学生M)
B：子ども理解	内省3：科学遊びなど普段生活しているだけでは体験することができないことができるからこそ、子どもはとても興味津々で取り組んでいて、その様子が特に印象に残った。(2年生・学生W)
	内省4：自分はウォークラリーのポイントで遊びを通して子どもと触れ合った。子どもと触れ合う機会が少なかったため、発想のユーモアや自分にはないものを持っていて新鮮に感じた。(3年生・学生A)
	内省5：楽しそうに参加してくれる子どもたちを見て、私自身もとても楽しめた。午後に活動をしたジャングルカルタでは、生き生きと表現する子どもたちから、「あ！こんな表現もあるんだ！」と気付かされ、学ぶところがたくさんあった。(3年生・学生N)
C：家族の多様性	内省6：科学遊びでは、親子、祖父母が一緒に作っているのを間近で見ることができて、いろいろな家族の関わりを見ることができた。言葉遊びのときも、いろいろな家族があるというのが分かった。子どもがやってみるところや、親がやっていて、子どもができそうなところだけ子どもがやるところなど、たくさん見られて、各家族ごとにどのように伝えるか、誰に伝えるか、を考えながら参加することができた。(2年生・学生S)
	内省7：「そうじゃこども大学」に参加して、たくさんの親子と触れ合うことができた。1歳位の赤ちゃんから小学校低学年位の子どもが多く、たくさんの関わりが持てたと思う。(2年生・学生H)
	内省8：子ども同士の関わり、親子の関わり、保護者同士の関わり、学生と地域の人々の関わりなど、いろいろな人が関わっているところを見ることができ勉強になった。様々な世代の人々と関わっていくことで、いろいろなことを学んだり、経験したりすることができると思った。(3年生・学生O)
D：活動に相応しい援助	内省9：言葉遊びでも科学遊びでも、子どもや保護者の方が楽しむためには、まず自分が楽しみ興味をもってもらえるような声かけをすることが大切だと思った。また、参加しやすいような説明や声かけや雰囲気作りなどの環境構成も大切であると学んだ。(2年生・学生S)
	内省10：(ダンスのとき) 子どもたちが参加したくなる声かけや、参加したくない子どもたちへの配慮も学ぶことができたと思う。(3年生・学生N)
	内省11：科学遊びの場面では、家庭でできないことであるからか、多くの人来てもらえた。しかし、計量する必要があったので、1対1で関わるべき場面もあり、集団で行う際にも違う配慮を考えなくてはいけないと感じた。(2年生・学生K)
E：発達をふまえた援助	内省12：言葉遊びでは、カードでの文字作りをして自分達でルールを変えたりすることで、より多くの言葉を連想することができると思った。(2年生・学生Y)
	内省13：科学遊びの尿素ツリーは、たくさんの親子が来てくれて一緒に楽しむことができた。年齢によって言葉の使い方ややらしてもらうことを決めたりして、教えることができた。(2年生・学生T)
	内省14：大学生の自分達が遊んでも、そのルールを子どもにうまく説明するのは難しいと感じた。分かりやすく楽しく遊べるルールというのは、自分達と子ども達で違うと思うので、いろんな遊び方を考えることが必要だと思った。(2年生・学生T)
F：実体験の価値	内省15：私はウォークラリーの「1枚の紙をはさみで切ってくぐるか」という遊びの担当でした。実際に参加してみて、子どもと保護者の方と触れ合うことができて、楽しかった。しかし、子どもに遊びの説明をするのが難しかった。小学生くらいになると、説明を聞くだけで遊ぶことができるが、幼児だと一緒にやっていくことが大切だと感じた。(3年生・学生M)
	内省16：様々な年齢の子どもや保護者の方と関わることができて、普段の学校生活では経験できないことを経験することができた。(2年生・学生K)
	内省17：私はウォークラリーのポイント地点で、親子に秋のうたを歌ってもらうミッションの係をした。歌はどんぐりころころなど、子どもたちがよく知っているものを中心に選び、衣装も季節にちなんで、ハロウィンの仮装をした。大学で地域の子育て支援のイベントに参加できて、とても良い経験になった。(3年生・学生T)
G：親子遊びの意義	内省18：親子の関わり方を見ることができたり、参加に意欲的でない保護者の方への対応など、普段はできない体験ができた。(2年生・学生H)
	内省19：科学遊びでは、「尿素ツリー」をして、子どもが楽しめるだけでなく、親子で一緒に遊ぶ大切さを学んだ。また、様々な年齢の子どもが楽しむことができるのだと知った。(2年生・学生Y)
	内省20：「そうじゃこども大学」に参加してみて、子どもだけでなく、親子と関わることができた。親子での参加だと、子どもだけでは難しいことでも一緒にやれるところが良かったと思う。(2年生・学生X)

## VI. 保育者養成教育と地域の多世代と交流する実践の可能性

本論では、新しい子育て支援の実践「そうじゃこども大学」について、大学と地域の連携の在り方や実施体制の整理し、また

この事業に参加した学生の学びの在り方を検討した。今回の取り組みの最も特長な点は、官・民・学の連携により役割が明確化され、教員が広報や実務に追われることなく、遊びの内容の準備や学生との関わりに十分時間を割くことができたことで

はないだろうか。保育者養成大学への地域からの期待や要望を、地域と共に解決していく1つの手がかりを得られたと考えられる。今後このような実践交流を保育者養成教育として位置付けていく場合、重要な点であろう。学生の学びとしては、子育てや家族の多様性に関する新しい気づき等が獲得されており、学生はこのような取り組みに参加することで、子どもを中心とする家族の在り方、またその援助について実践的・多面的な学びを得られる可能性が示唆される。将来保育者になる者として意味ある学びが形成されており、普通の授業では得られない教育的効果が期待できる可能性があると考えられた。

保護者による自由記述のアンケートでは、「クリスマスツリー作りは、科学の学習のようで良かった。学生が子ども達に優しく接してくれていたの、安心して参加できた。」(50代男性・息子の妻と孫2人と参加)、「ダンスワークでは、子どもと一緒にになりきったり、思い切り体を動かしたりして楽しむことができた。」(30代女性・子ども1人と参加)等、大人も一緒に楽しんでいる様子を読み取ることができた。家族は、父親と子ども、祖母と孫等、予想以上に様々な組み合わせで参加しており、子どもを中心に充実した遊びや学びの体験を求めている。子どもが小学生以上になると、交流の楽しさだけでは物足りず、学びや発見や感動等が得られる体験が求められ、交流の質により期待が寄せられる。本実践は、その受け皿として機能する可能性がある。「そうじゃ子ども大学」は、1回完結の実験的な試みであったため、大学の特性を活かした子ども・子育て支援のより良い在り

方を今後も追求する必要がある。また、本論において、実践における学びの一部を明らかにすることができたが、教育効果が向上する教育課程への組み込み方や、地域との交流を学生の実践力にどのように結び付けていくのか、という課題は未解決である。今後もこれらの課題の解決に向けて、実践と研究を継続する予定である。

#### 註

註1) NPO 保育サポート「あい・あい」(2000年設立、代表：中島久美子)は、総社市ファミリーサポートセンター、「子育て王国そうじゃ」まちづくり実行委員会事務局を兼ねる。総社市において、幅広い子育て支援活動を行っている。

URL <http://www2.kct.ne.jp/~ai2002/index.html> (情報取得：2015/6/16)

#### 引用文献

1) 岡山県：「おかやま子育てカレッジ」URL <http://www.pref.okayama.jp/page/273496.html> (情報取得：2015/06/16)。

2) 片山啓子・三好年江・芦田英厚：「地域協働による「にいみ子育てカレッジ」の概要と設立過程—大学内子育て支援拠点・新見モデルの発信—」、『新見公立大学紀要』29(2), pp.115-118, 2009年。

3) 京林由季子・岡崎順子・中野菜穂子・新山順子・樟本千里：『県大そうじゃ子育てカレッジ実践研究・活動報告集』、県大そうじゃ子育てカレッジ実行委員会。2013年。

4) 厚生労働省：『保育所保育指針』、フレーベル館。2008年。

5) 金田利子・山路憲夫・瀧口美智代：「大学での「世代間交流広場」の実践—地域における子育て支援・相互発達をめざして—」、『白梅学園短期大学 教育・福祉研究センター研究年報』10, pp.4-23, 2005年。

6) 須永進：「子育て支援論の構築化に関する研究：保育者養成教育の試案」、『三重大学教育学部紀要, 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学』65, pp.141-148, 2014年。

7) レオ・レオニ：『あいうえおの木』(谷川俊太郎訳), 好学社, 1973年。

8) 村田芳子：『最新ダンス・楽しい表現運動』, 小学館, 1998年。

9) 川喜田二郎：『発想法—創造性開発のために』, 中公新書, 1967年。

#### 附記

本論の一部は、第68回日本保育学会大会において、発表した。

Practice of New Child Rearing Support Where Students Aspiring to become Childcare Workers  
Interact with Multiple Generations at University: A Case Study of “Soja Children’s University”

Junko NIIYAMA ( Okayama Prefectural University)      Yukiko KYOBAYASHI ( Okayama Prefectural University)

Chisato KUSUMOTO ( Okayama Prefectural University )      Tamiko TAKAHASHI ( International Pacific University, Okayama  
Prefectural University Part-time Teacher)

This study aimed to examine the “Soja Children’s University”, a practice of a new child-rearing support method. This research study organized the implementation structure and the ideal form of coordination between the university and the local community and further examined the way in which the participating students learned. Through analysis of post-event self-examination, classifications of learning were made in areas such as making new discoveries regarding child rearing, children behavior, family diversity, various insights into how child-rearing support should be provided, the value of real experience, and the significance of parent-child play. Based on what was gathered by the university students who participated in this program, it is possible to enhance the students’ practical learning regarding the state of families with young children and how to support them.

Keywords    ;      child-rearing support, practice, university, local community, childcare worker